

※本資料は、一般社団法人 教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

乙瑛碑

動画「史書」
別冊ワークシート P5

別冊臨書用手本集 P29・30

教材研究

作品について

概要

後漢の永興元（一五三）年に刻された、百石の卒史（下級の事務官）を置く由来や顛末を記した隷書碑である。この碑には題額がないため、書物によっては「魯相置孔子廟卒史碑」「孔廟置守廟百石孔鯀碑」「魯相乙瑛置孔子廟卒史碑」「魯相乙瑛請置百石卒史孔鯀碑」「孔廟置守廟百石卒史碑」など、多くの呼称がある。しかし、あまりに長いために現在では「乙瑛碑」で通行している。

高さは二百六十センチメートル、幅は百二十九センチメートル。十八行にわたって七百六十六文字が記されている。立碑のときからそのまま山東省曲阜の孔子廟内にあったが、現在は廟内の漢魏碑刻陳列館に保存されている。

碑は、後漢の恒帝のとき、魯国の前相であった乙瑛の申告によって、魯国の孔子廟に百石の卒史一人を配置して、孔子廟を守らせることになったいきさつを述べ、さらに乙瑛以下その件に関係した鮑暈・孔麟の功績を顕彰するために建てられた。

当時の上奏文の形式そのままに残されており、四つの段で構成されている。当時の上奏文の形式を知るうえでも貴重とされる。

書かれている内容

孔子の子孫にあたる孔麟が、時の魯国の相である乙瑛に、孔子廟の保護・整備を相談したことがきっかけとなり、一連の事業が始まった。碑には、その経緯と顛末が四つに分けて記されている。

第一は、孔子廟に百石の卒史一人を置き、廟を守り、礼器（祭祀用

の諸器物）を管理させたいという、魯国の前相乙瑛の願いを受け、司徒（総理大臣）の呉雄と司空（官房長官）趙戒が上奏したこと。
第二は、呉雄と趙戒が、担当官の馮牟と郭玄に上申内容の妥当性を質問し、実施すべきであるとの回答を得たので朝廷に奏請したこと。
第三は、奏請に対する認可の決済が下り、詔書の内容に従って選考し孔鯀が選出され、このことを司空府に報告したことを述べている。
第四は、この事業に尽力した魯国の前相乙瑛、百石卒史の官舎を造った曲阜令の鮑暈、そもその発案者である孔子十九世の孫の孔麟の名を記し、その功績をたたえている。

指導のポイント

鑑賞の留意点

「乙瑛碑」の鑑賞にあたっては、他の隷書の古典との比較を通して、書風の解説にある「力強く堂々とした風格」がどこに由来しているのかを分析させたい。

また、波磔を取り上げて、それぞれの印象の違いに焦点を当てることも考えられる。八分隸の代表的古典としての「乙瑛碑」の、さまざまな側面を理解させたい。

字形の特徴

- 横画は水平になり、おおむね扁平な字形となる。
- 背勢の字形が多く、引き締まった緊張感を感じさせる。
- 波磔や右払いが強調され、左軽右重のバランスになる。
- 分間空白は等間隔を基本とする。

筆法について

起筆は藏鋒である。波磔における波法は筆圧のかけ方の歯切れがよく、収筆に向かう変化も早めで、めりはりが強い。波法の指導にあたっては、筆圧を緩めて筆毛を引き上げるタイミングや、側筆に構えて動作させた筆毛を直筆に起こす位置を意識させる指導も効果的である。また、隷書の筆法に不慣れな生徒にとっては、起筆で矯めた筆毛の力を維持できず、水平方向に運筆することが難しいので、適切なアドバイスや実演指導が必要である。方眼紙を用いた起筆部と収筆部の位置確認なども有効である。適宜、教科書の二次元コードを読み取り、教科書運動コンテンツの運筆動画を確認するのもよい。

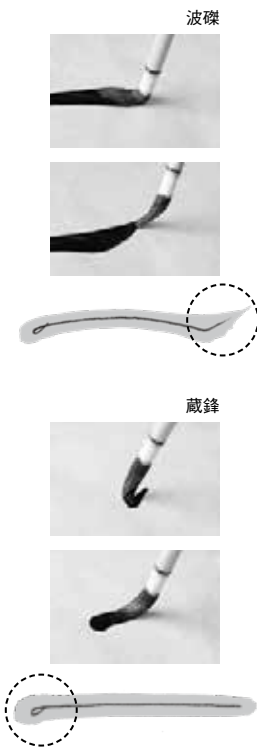
筆使いの指導のポイント

- 起筆では、穂先や軸の方向、傾きを意識させる。
- 起筆は藏鋒を用い、筆を押し出すようにして送筆に移らせる。
- 波勢という隷書独特のリズムを意識しながら運筆させる。
- 左払い・右払いの筆使い
- 左払い

起筆は藏鋒を用い、穂先を外に出さない。送筆は直筆で、じっくりと筆圧をかけて運筆する。払いの部分は特に筆圧を加え、押し出すように止めてそのまま離すか、軽く上部に押し出す。

●右払い

左払いと同様に起筆は藏鋒を用い、送筆も直筆で運筆する。収筆は筆圧を加えていったん筆を止め、側筆気味に重厚に払い出す。



臨書のポイント

